

知ろう！世界の子どもたち

このコーナーでは、私達が想像もつかない世界に生きている子供達の事を、お伝えしようと思います。これを読んで、特別に、何かを始めようと言う事ではありません。勿論、何か役に立てる事があるなら、それを始めるのもいいでしょう。しかしながら、それは難しいと推測されます。ですから、まずは『読んで』『知って』『考えて』ください。そこからスタートです！

保護者の方が読まれてから、保護者の方の判断で、お子さんに分かりやすく伝えていただいてもかまいません。

お話 4

カリブ海に浮かぶ島、イスパニョーラ島。その島の西にハイチという国がある。この国は、1804年1月1日、植民地占領をしていたフランス人を追い出し、世界で初めての黒人による共和国、そして、ラテン・アメリカ最初の独立国家を樹立した。

そんなハイチの首都、ポルトープランスに住むジネットちゃんという女の子を、イギリスのBBCが記事に取り上げている。

ジネットちゃんの日課は、家のための水汲みで始まる。公共の水汲み場で、青いバケツに水をたっぷり入れて頭に載せ、毎日4キロを歩く。ジネットちゃんは6歳だ。

ハイチは、アメリカ大陸とその島々の中で、『貧しい国』の一つとされている。人口の8割は貧困層で、人口の半分の人々が、毎日を60円以下で暮らしている。ハイチの人口は、中南米諸国の人口の2%ほどだが、中南米で死んでしまう赤ちゃんの5人に1人は、ハイチの赤ちゃんだ。

そして、ジネットちゃんは、そんな貧しいハイチの中でも、更に貧しい家に生まれた。

ある日、お父さんがジネットちゃんに言った。「お前は、都会に住む遠い親戚のところで暮らすんだよ」と。都会のポルトープランスに来たジネットちゃんは、それ以来、お金のもらえない使用人……。もっと言うと、奴隷同然で働かされている。毎日、水汲みに、洗濯、掃除、その家庭の他の子供達の世話……。ジネットちゃんは、友達と遊ぶ時間も無く、学校で勉強することも無い。

このような子供達は、ハイチではレスタベクと呼ばれ、ユニセフなどの調査によると、その数は25万人ほどにもなるという。そして、国の経済の悪化に伴い、その数は増え続けているという。

レスタベクの問題について、ハイチ政府の見解は、「貧しい人々が、自分の子供により良い生活を与えるための、ハイチの伝統文化だ」と言い、貧しくて子供を育てられない親達も、そう願って子供を預ける。

だが、残念ながらその実態は、世界で最も早く奴隷を駆逐した国に残る、現代の奴隷制度の構造だ。

ユニセフは、このハイチの子供たちの未来と希望のために、世界は更なる努力をするべきだと言っている。

参考文献：mixi 内コミュニティー『世界の肖像』

子供の幸せを願わない親はいません。きっと、ジネットちゃんの両親は、自分達の元にいるより、ジネットちゃんは裕福な生活ができてると信じているでしょう。我が子の幸せを他人に委ねないといけない辛さ、親の思いが実現されないハイチの現実……。自分達の手で子供を育てていけるあり難さ。子供の幸せのために、もっと頑張らなければいけないと感じます。